

# かぞくのほなし きむら あきこ

## 第7話 数か月間の妹

私は二人姉妹の妹のほうだ。小さな頃は、姉たちの後を必死について歩いて遊びの輪にいれてもらっていた。だから、いつも、妹が欲しいと思っていた。妹がいたら、優しく一緒に遊んであげるのに・・・そんなことを考えていた。

ある時、商店街で飲食店をしているところの娘さんが小さな子どもを連れて帰ってきた。我が家が馴染みにしている店で、顔を出すたびに、メグと呼ばれていた2～3歳のその子が店の中をちょろちょろしていた。私の母が、メグの母と祖父母に、店が忙しそうだし、家で預かるよ、と言って、メグを我が家に連れてきた。

私は、小学校3年生。家にきたメグを妹のように可愛がった。メグは、まだ上手に話せない下手くそな言い回しで、私に遊びを誘った。私が学校に行っている間は何をしていたのだろう。私が帰ってくると大喜びで遊びをせがんだ。最初のうちは、妹ができたと喜んでいた私も、だんだんと生活に慣れてくると、やはり学校の友達と遊びたくなった。まわりつくメグを鬱陶しく思うこともあった。

やがてメグの母は店に出なくなった。どこに行ったのかも当時の私は気にしなかった。我が家にメグがいることも日常になっていた。メグも我が家の一員のように過ごしていた。親と離れても泣いたりすることはなかった。ある時、メグの母が顔を見にきた。高価なおもちゃを持ってきて、すぐに帰って行った。私は、子どもながらに、「うちの親は、あんなおもちゃを買ってはくれないだろうな。メグはいいな。」などと思ったりした。

数か月たったある日、父方祖母が亡くなった。遠方の土地の葬儀に連れて行くわけにもいかず、メグを飲食店の祖父母のところに連れて行った。それ以後、私はメグに会うことはなかった。

小学3年生の頃の、ほんの数か月の思い出。今でも、当時のメグのことをよく覚えている。その時は考えもしなかったけれど、たぶんメグの母は若かったと思う。そして、メグの父を私は知らない。シングルマザーだったのではないかと思う。大人になってからメグの家の話を少しだけ聞いたことがある。メグの母親や祖父母は、事情があってそれぞれバラバラになってしまったらしい。店も畳んだと聞いた。その後の消息はわからない。

家族の話を書こうと思って考えていると、メグとの思い出が蘇ったのだ。今から45年も前の話。あの頃、時代なのか地域柄なのか、近所の子どもを預かるというのはよくあることだった。まだ、共働きが主流の時代ではなかった。だから、自営業でない限りは、だいたいどこの家庭にも母親が在宅していたように思う。それでも、働きに出なければならぬ時には、なんとなく誰かが（保育園に預けることももちろんあったのだろうけれど）みていた時代だった。

私はメグとのことを少し残念に思っている。その後、元気にしていたのだろうか。どんな大人になったのだろうか。ほんの数か月だけ、私の妹だったメグ。

少子化対策が叫ばれ、子育て環境の改善や子育て支援のあれこれが充実している時代なのだと思う。でも、なんだかドライな世の中だと感じる。昔が良かったと言うつもりもないし、今が良いとも言い切れない。でも、私は、メグのことを思い出した時に、忙しそうな店で退屈をしているメグを預かると言った母や、我が家みんなでメグを歓迎したこと、そして、家族の中にメグの思い出があることは、ちょっと心が温かくなるのだ。

**おわり**